

児童一人一人が自ら進んで学ぶ授業づくりの工夫
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して～

提 案 草加市立両新田小学校 教 諭 大久保 直子

1 はじめに

特別支援学級では、学年や特性の違いから個に応じた学習が多く、個別で課題に取り組む時間が長くなりやすい。児童一人一人の特性に応じた学習形態は取りやすいものの、協働的な学びを通じ理解を深めたり、一人一人に自己有用感を体得させたりするためには工夫が必要である。この個別最適な学びと協働的な学びの一体化を実現させることが、児童一人一人が自ら進んで学習に取り組む意欲に繋がると考え、授業づくりを行ってきた。

2 学校・学級等の概要

(1) 学校概要

本校は、埼玉県南東部に位置し、南側を東京都足立区と接する開校41年目の学校である。児童数は444名（10月1日現在）。通常学級15クラス、特別支援学級3クラスの計18クラスで構成されている。児童は明るく活発で、伸び伸びとした雰囲気の学校である。特別支援学級は、知的障がい学級が1クラス、自閉症・情緒障がい学級が2クラスあり、計20名の児童が在籍している。

(2) 学級の児童の実態

自学級は、男子4名、女子2名、計6名の児童が在籍する自閉症・情緒障がい特別支援学級である。学年は、1・2・3・6年の4学年にわたり、転籍予定の男子2名を含む計8名で活動している。児童同士の仲も良く、最上級生がリーダーシップを発揮し下級生をまとめている。どの児童も物事への興味・関心が高く、意欲的に学習に取り組んでいる。

3 取組の実際（具体的な実践）

学年や発達特性に違いがある特別支援学級で、いかに個別最適な学びと協働的な学びを一体化させることができるのか。そこに焦点を当て授業づくりを行った。本実践は、計算問題はできるものの文章問題となると内容を正しく理解することが難しく読まずに答えてしまう、状況を絵や図で表し説明することが苦手、実際の生活場面での応用が利きにくいなどの課題へアプローチするため、「それぞれの計算式が使えるお話問題を作ろう」という題材で取り組みを行った。

(1) 教材・教具の工夫

個別最適な学びを充実させるために、どの方法が自分にとって学びやすいかを実感できるよう教材・教具をいくつか用意した。

一つ目は、具体物である。式からお話問題を作るためには、イメージを明確にしたリ操作したりするための「物」が必要である。実際に物を手にし操作できるよう、実物をはじめ制作した模造物も用意した。

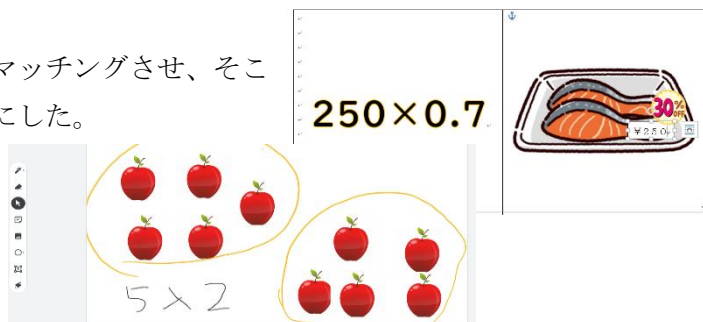


模造の「たこやき」

実物の「だんごり」

二つ目は、絵カードである。式と絵をマッチングさせ、そこからお話問題を考えることができるようにした。

三つ目は ICT の活用である。Jamboard 上にイラストだけを貼りつけておき、それを操作することでお話問題作りのきっかけとした。



ペアやグループで学習する際は、その都度教材・教具を限定した。三つの学び方を獲得した後は、個別課題を行う際はどの方法を用いてもよいこととし、自分にあった方法で学びを進めていくことができるようにした。

(2) 話し合い活動の工夫

協働的な学びを実現させるためには、児童同士の話合いを活性化させる必要がある。そこで、「しかけ」を用意した。どの教材・教具を使う場合でも、その中から選ぶ、というだけでは話し合いは発展しない。その式になるために、あるひと手間を加えないと成り立たない、という状態にしておき児童同士が話し合いの中で答えにたどりつけるようにした。数が足りない、値引きシールが貼っていない、という中で話し合いや操作を通じ意見を交換できるようにした。



(3) 授業展開の順序

通常学級であれば、まずは自分で考えその後、友達と意見を交換する、という流れが多い。しかし、特別支援学級では、自分で考える、という部分が難しい児童もいる。そこで、ペアやグループでの活動を先にすることで、その後の個別課題に取り組みやすいようにした。友達との交流の中で方法を確認し、自信をもって次の学習に移れるようにした。

4 成果と課題

(1) 成果

教材・教具を複数用意することで、自分自身にとってどの学び方が一番理解しやすいのかを発見することができた。また、友達との話し合いの中に「しかけ」があったことで、より活発に意見を交換し式の意味も深く理解することができた。話し合いの中で自分の意見が認められたり、自分では気づかなかった考え方に触れたりすることで、自己有用感が高まり学習意欲も向上した。

(2) 課題

「お話問題を作ろう」という題材に対し、文章化する場面では上手く言葉として表現できない部分もあった。ここに対するアプローチがもう少しできるとよかった。

5 おわりに

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実は、子ども達にとって大きな力となる。どんな教材を提示し、どんなしかけを作り、どんな授業展開をすべきか、今後も学び続けていきたい。